

## ■静岡茶の情報発信について

Q 今日、緑茶ドリンクの急激な伸びや、効能研究の進展などにより、茶に対する注目度は高まり、更に、海外での日本食ブームなどによる緑茶の急速な普及などを見ましても、最近の国内外におけるお茶の関心度は、想像以上のものがあります。

しかし、本県の茶業界は、生産・流通とも大きな壁にぶつかっております。

お茶は、静岡。このイメージが壊れないと思っている人がほとんどですが、絶対トップの位置がおびやかされているという事実を直視しなければ、私は大変なことになると考えます。

若い世代はリーフ茶でなくペットボトル茶を好み、生産面では、鹿児島県を始めとする九州の産地の基盤整備と官民一体となつての静岡に追いつけ追い越せの動き、京都宇治茶の茶文化と歴史を背景にした流通PRの攻勢など、お茶の本家静岡は、守りになっているのが現状です。

静岡には、お茶の本家として、リーフ茶の需要喚起、静岡発の茶文化の創造と発信、茶に関する学術研究の集積と普及、多様な業種・団体とのネットワークの構築などの戦略が必要と考えます。

しかし、県内には、お茶どころであるにも関わらず、多様なお茶や産地ごとの銘柄茶などを飲んだり、掩れたり、お茶に関する情報を総括的に入手できるような場所がありません。

そうした中で、県は、国内外の茶の情報や文化を広く発信する全国初の拠点基地を静岡市内に設置し、新茶シーズン前にオープンを見込むとのことでありますが、その目的と具体的な機能について伺います。

A 現在、静岡駅南口の水の森ビル 3 階に、お茶の情報発信拠点となる「しずおかオーCHAプラザ」の整備を進めており、静岡茶を楽しみ、お茶の文化に触れることのできるサロンと合わせて、財団法人化する世界緑茶協会及び県のスタッフが駐在する施設として、この 4 月からオープンする予定であります。

ここでは、日本茶インストラクターが常駐してお茶のおいしいいれ方教室などを随時行うとともに、お茶の専門家によるミニ講座の開催や映像による産地紹介、茶の歴史的資料や茶器の展示、新しいもてなし方の提案など、工夫を凝らした様々な企画を行っていきたいと考えております。

また、世界緑茶協会による海外も含めたお茶の産業、文化、学術に関する幅広い情報の提供や茶文化セミナーの開催、世界お茶まつり 2007 の企画、運営の推進拠点として活用していくこととしております。

「しずおかオーCHAプラザ」からお茶に関する様々な情報を国内外に恒常的に発信することにより、「世界の緑茶の中心地静岡づくり」の拠点としてまいります。

## ■人権が尊重される社会の構築について

Q 1970年代以降の経済発展の過程で、日本は経済効率を最優先した国をつくり出した。その結果が耐震強度偽装事件、建築確認偽装事件問題などであり、利益さえ上がればよい、自分以外の他人に対してやさしさとぬくもりがない社会になってしまいました。安心して住むことができなければ、人は生きられません。高齢者にとっては尚更です。居住の権利の保障は生存権の基礎であり、基本的人権の問題でもあります。

また、人間がいかに豊かに暮らせるか、という視点から考えると、日々の生活の中で人権を大切にしながら暮らすことが当たり前の感覚を持つ社会、つまり、人権が暮らしの中の一つの文化となることが大切であると考えます。そして、そのことが日本人は経済性一辺倒から抜けだし、人間本来の「より良くいきる力」を取り戻すことができると確信しております。そこで、県民に対してどのように啓発を行うのか伺います。

A 県民への啓発につきましては、人権啓発センターを拠点として、ふじのくに人権フェスティバルやマスメディアを活用した広報、ホームページによる情報発信などを引き続き行うとともに、企業を対象とした講演会にも取り組んでまいりたいと考えております。

今後は、市や町、民間団体などとも協働しながら、こうした取組を一層充実させ、人権が尊重される社会の構築を目指してまいります。

## ■韓国との文化交流について

Q 朝鮮通信使は、今から400年前の1607年の第1回から1811年までの計12回来日しており、その間、本県を10回訪れたという記録が残っており、県内各地には、朝鮮通信使に関する史跡など文化資源が多数存在しています。朝鮮通信使の通信とは信頼を通わす使いという意味があります。

折しも、平成19年は、第1回目の朝鮮通信使が日本を訪れてから400年目を迎えます。国においても、昨年11月に交わした「日韓の観光交流の促進に関する日韓観光当局者間の覚書」に基づき、スポーツ交流や歴史をたどるイベント、映画等文化を通じた交流などを促進することとしております。くわえて韓国は平成21年春開港を目指す静岡空港の就航予定先でもあります。

こうした機会をとらえ、徳川家康が朝鮮通信使を迎えるに当たり、豊臣秀吉の朝鮮出兵により日本に連行されてきた約2000人余の人々を施設と一緒に帰国させたこと、鎖国といわれた徳川の時代に善隣友好の交流があったことなどの歴史的事実を学び、地域の文化資源や民間レベルの交流を最大限に活用した韓国との交流を一層推進していくべきだと考えますが、県として今後どのように韓国との文化交流を進めていくのか伺います。

A 韓国との交流は、平成12年以降、済州道とスポーツ、文化を中心に友好交流を進めているとともに、世界少年サッカー大会や世界お茶まつりなどを通じた国際交流

のほか、優学旅行での韓国訪問や、空港がない現在でも、観光客などが本県から韓国へ約6万人、韓国から本県へは約4万人となっているなど観光交流も盛んです。

今後は、朝鮮通信使を核として、県内各地域や韓国とのネットワーク化を図るとともに、平成21年の国民文化祭に向け、来年度開倦する「伝統文化フェスティバル」での相互交流を行うなど、韓国とは、文化、観光、国際が一体となった交流を堆進してまいりたいと考えております。

■歴史的文化財の保護対策について(略)

■県職員の人材の生かし方、組織のあり方について(略)